13
1.105

文化九壬申秋刊

門へ遠13
1905
巻

生且偐貼脚色巧

浪花土産

初物語

春亭画

淨丑科諢撒濃多

蔵書印

序

天とかけ合て初郭公を八千八聲乃初音高く地を走る

玉子の殖屋と

初松魚を一圓二分方初直高

釋尊新茶の産湯盥。

松屋善兵衛
關一藤

ぎやうとうあまきて初聲ハ
蜀魂ハ鰹を指。天上天下
ごくらくも高ひとのみとも。
豈及べんや新下ハ歌舞つ。
初物の名ハ松てもあみ中村

せゝ戯丈千両役者ハ初評判
八百八町ハ求てえ高。
さ程ハ初物ハ中ハ後ハ
筆ハ御江戸の性質。
好も嫌もこきまぜの舌ハ

しての由賞歡。七十五日生
延喜彰狂言の初物悟。亭が
三文の智慧を揮ふ。八文字屋
の声色法の。唯新しく
しのばるゝが。此正本乃〇ぐ。

ゝ本とまりよ

文化五年戊辰卯月。釋尊
降誕三七夜目。吉例
うゝず一昼夜の急案
八文舎口調ふ倣く

式亭三馬記

味よく
元
焼バ
弁
茶
漬飯

さっぱと
ちっちゃ
熱の
塩
梅

ゆこうめげ
きかんげん
ちょうえん
伝右衛門
姫川のぐんえん

来来賜顧
俏看官
行首且頭
方上欄
扮做浣紗
浣紗處
我們眼只
向場觀
右勾欄開場詩

浪花土產初物語

坂元のすゝろふ爲ごて

三馬編

發端

かづき芝居を人はいつと稱とゝよろこぶの
たゝくゝとゝで古ふ狂ろ世の中ふある人
てわざたゞぐふものあれば心ふおもふことを
ろ紅ものきゝ手のふ法ろゝ法ろいぐせる

あり。花ゐなく覚餅ふ仕切場の名あれば。
小ふ吉みかげ朕野ぶ力ともつまづして
はつ如赤乃岩をうづ。めふんえぬ酒呑
童子も狂言ふはぐう。猛な金平とも
丝歎ふあれとおもう。男女の弁ともぬき
ぐて和ぐうを俗優は道あうう。此俗優ハ
天は岩戸のかわざはつはぐまうて。八雲之
世雪お国ふ傳う。ぐなく吾嬬みてを

三芝居まで。みにうきれば。まのはぐう
は嘗我物語う。みのなぐは顔ア出して
うれまで四季をとりは狂言俳佰。讃傳楽
の縁ふうう。勸善懲悪はあうは。まのあ
うふあうれ。ほぐふ敵役の奸謀重代
の法宝とまさあげ。立役の忠言かうう若
殿乃耳ふ逆ふ刀は掏打いよ悪魂と工言う
扇の打擲。罵詈あううきけぶ。佞人ハ名聞

乃上下を著く正面ふまきゝた忠臣ハ無欲の
襤褸を纏つゝく花道ふさ海ゝ日おゝの
日月ちゞゝく雪翠屋ふかゝゝいゝぐゝ先
ゝゝゝゝゝゝぎりに至りて善悪おのゞゝ
章ちゝきれば男女差ゆ貴賤とえゝぐゞ
好嫌のあきゝ妥元妓ゝなゝゝゝゝきて
名人上手ゝゝてゝゝ役者ゝゝゝ
魂後大体ゝふ大体ゝて面白ゝ細密ゝふハ
孤窓ゝゝおゝゝゝしゝゝ以奥中村坐ゝのゝ
新下ゝ伎義ゝよゝゝゝゝゝ浪花津に
まゝ浜白ふ梅ゝ加賀屋ゝ芝翫丈八百八町
四里四方此大江都ふ居贔屓ゝ水道の
ゝふかゝゝゝ皆ゝ見厚くゝゝゝゝゝ
幕とゝゝめゝ大浩の大丈夫二番目乃玉屋
新ゝ凧ふゝゝでいゝゝゝゝ猪ゝ猪ゝて
評ゝきゝ。おゝゝん傳ゝ素の精ゝ

くのゐんほう右衛門まさあるらかと風呂乃中でも秋右まつ髪結床でも筒守のけいもん風ふ蘭こく昌眉ひきくとまりて招く鯉魚乃一軸めりくくと聲色はくくふ暗の夜と生くも返くも義太夫とまくもちぬも有田唄庵うた和とくくたれあまちち芝居傍連くお江戸産れ昌眉の強き吐人の蕓のくくけあくけらとはけぬハ有雁きお江戸のたてひきふあくずや先人加賀屋一見治ふ俗名歌七丈元ち加刈乃産めく寛保二年の顔アくあくう京大坂の舞臺とはくくあ江戸のせえ居人度くくくと賓暦明味おつぎて上上吉の大たくくの當り狂言あまくくう人品骨柄威あくく猛く眼中ちる

ぐく敵役ふはくふてち此人ふはくくまなと自笑ぐ役者大全まくさ綱目ふ記をう今せえ玩

丈福之助の其へもうしちんて芝居勒坐の噪より
清玄が藍隈の藍より生うく藍より青く上
るのさまざまあり由これも自笑が評判記に
ちらちら此頃駿河屋の王いきりきりく馳
来り芝既丈は既に評を小冊ふめうたくと
責うと頻に在下妻の森蚊のてんてんく
素ちう評判者めとあうぶ捲べ自笑めうく
頭取曰しも書とべ何でも四文ともうと奴

いらざる世話といふれても一言もたらきとなれば
藝評をいふぐもお江戸町くいぐれもさ
ぐ
ぐんしみく能そくの太鼓おそれも忘大入大
あらう予毫を採るとてもやはり同じ
ゆくといるまでとあくる日扱えて
おまへ八十九ぐ世吏小踈し君を想ふも身
を思ふ芝琉丈は大酒ぬ中村坐の大當に
あやうく あうやくもお金ぐ役さぐ

誉田の中ゝか物ぐ芸のよゝあゝ評判に
うゝぐでは具足寸書のお尉ふあゝさゝ用。
そゝしいはゝゝ物語と小ゝぐゝ書のゝ廿之玩
大ゝ初ゝ表ゝゝ今日までの位付を年く
の評判記ゝ皆ゝなれば今ゝくゝ
書ゝふおよぐず。あぐ一日も早ゝお徳ゝ。
ゝあゝ誥の宿かんぐん是非ふゝくゝなゝ
ゝゝれ。せゝゝふゝ地み視笞。なんかさ

初ふ筆ゝゝすぐふ拍子をさゝめゝり

語記

今ゝふけゝぐめぬ袴衣ゝ牧ゆく方でひさ
ゝ記是ハ諸国見ゝ賈ふもあゝ又白拍
子ゝてもいゝで武者修りふを刀をたゝく。
早飛脚ふを足ゝゝ親ゆづゝ徒栗
毛ふ片ちんぐめ草鞋ゝ雨。百度笠ゝ
ゝめゝべき。菅笠目深ふ打ゝぐゝ連中

といふ文字を白く抜き出だし雑巾にして
ばくちの風呂敷包、観世撚り中結び
貧乏くさいいなりの旅役者、日焼け
炭と顔は色も赤山下手蔵にて風来人
そのまゝ名ある役者の角ふかぐつをはき
飯焚なりしが名ばかりの横丹色
角役者にやまくて旅せ居のお荷物
とうきぎ、お草履をはきんですりとも出

やうくの頼りて手岡平右衛門といふ旅役
者は赤子をうばひ幕明のたゞ一に
あてられ、せゝ姫がきれ〳〵本舞台ふい役者
は出ばあるとまぐれ〳〵いつくとうひりれば
おなぐてをいくもいつて本舞台と二三返
走めぐる立者小ちゝ〳〵ちゝ〳〵後見に
肩先をはたまり捨ておぐ〳〵おり惜げふ示唆
へ入るとまづ一ばんうとうとうとうとうとう

樂屋まで顔出しに来たいと付
申した。ある時馬役の者病氣の為、幸いと他
言かない。度い馬は後足ばかり。坐頭
は役者との為に花道より首尾よく出でず
出られど。あやまって足の裏が痒くなり
ぬ。股引の内も痒くなれど馬は尾と
かぶりを振るゆえ、まと出でず搔くこも
ならぬぞ。あまりの事ぶさを左の足を

あげて足袋はずしと股引ふわあて。やっと
ひかんとされば乘る役者いろいろことけらば。
ぶりこと止る角ふあ足は男はとこら馬
は首ふりもっまんじゃいあほらいどうく
と後足を小声みたれみぞ。耳の早い見物
聽付。イヨ馬は親玉日本一馬の大將めぞ
ひっぐいのもっぐいとおっしゃるとゆ
く。後足の痒も口と搔。差ぶりぶ嫌さに

乘りかへんぞこゝろの馬は尾とあり
〳〵破〳〵尾は方〳〵首とさ〳〵〳〵ぐいと
あゝ〳〵ゝ拾ひもざんしやと乘と座頭面
見物の手へまりさは前足もきもに
たゝぶ〳〵樂屋へ入いんとする後足を圓
ホ樂〳〵さぶ〳〵みんぐみらぶ漸〳〵仕
〳〵あり〳〵とゝれば坐頭は役者ほう〳〵り
這上り〳〵ゝ〳〵ぐり仰天〳〵〳〵く

あげこまりこまりこまりまの足をおれ宮りん少を
さゝれたぶひホ狼狽さらぐとらく流石侍山
里の見物も馬り出〳〵られあるゝと山花
いよ〳〵こまりこのめ馬ぐの〳〵そのくのホ
細〳〵まぶホたれ敷〳〵ゝ年〳〵ぬと声の
う〳〵ゝもあり〳〵ゝ成ホ出〳〵びの
たまゝ仕損もつのおれそぐらて
一も二をなく着る〳〵古郷く

戻り馬・屋くるめんど悪落てさしふしを
つくど車輪もぐさのけしと坐頭めじう
そなくさんくけこの悪いてぐとみやー。
いいくのと大廿之屋ありたくんひろの
こきんくの。藏衣住宅の袴りぐら音
蒲華は初涙とつぐ。六尺棒りつく。
そぐ拾くくたぐ三声の書接とそう。
二三百勤用。絶句をぐど大でけ

なくぐ折り取次ぐ笑軽乃役者
そ撥用ゆくあり代役を勤げ。
めど度をよりどぐ助をくぐ。ぎりく
中上まそ山名宗全さん大下馬先まで
ぼもぐざりまそ。行く密ぐ使ド有
くきの低いぐはいませやくよ
き接たもど是もずいくあをきぐり
く。まけくらつぐ中上まそ山名

宗全さは出つてぐ
やりくふふくはさくはやさくぞといふ時ふ
ぞくくかけ生ぐ。大芝居のことなれば
見物あちこちのくふのまくまくとなる。切幕をまつ
やいふ。眼くんぐ切落の角人真逆こ面と
まくびぢ落やりくに這上れいよいよお役者
ぢくぢくぢ苦労とはぐふくちくれくくれくくれ顔をいよ
くくくく

しかるべきて物の上手めいめい作屋は太夫
雖彼は親方と三ケの津は名人役者と皆
友達この虚八百と元まのいつぬくちと
たつ太鼓持の頻作ぶり出ぬ先の
きつと幸い あそこふ十日さらん廿日居
候の剛強そうじ障子のきりげと
火打笛乃法くらひ あつまる多と燈
けん けりつの達ア 尾軽み家内の

世話とやくしの室蟬のもぬけ
けうい世の中ふ あつまる一德ゆいりや
もつとでまつ寺の和尚出けり百日乃
説法屁ちよきさ多き
名よあつ下野国那須野の原ふを
かつて道をあ出茶屋ふ体みつん
午の見うく頃なるで幸いの昼食
飯ごりをけば小判二両の俵澤庵

の香物ふくまれ。飯の弁ようこそやげうこのる
と食ものゝ茶ひとつゝいよ天目の赤ゝかさ。
利休ふくなくゝ茶ものんでもかゝりされ
代物どゝゝ香ゝごゝ茶ゝもちぶゝ
顔しゝゝ茶ゝまぶゝも下主なゝぬい
ゝゝ。さしゞゝのゝもこ芝居乃
大評判。蔦かつ村歌右ゝゝ
ゝ度中村坐の新狂云大あゝゝの評お

かゝとなく。山下野の持丸長者堀川傳家蔵
け秘蔵娘おきあんゝ。其美しゝゝ楊貴妃
西施小町衣通と紅白粉ぬゝふゝ代ゝ。
彼は賓人ゝ郭公の初音しゝふきゝいか
や。八千八声の大評判。五六年ゝのゝ尊の
あゝゝ芝居さん。吾嬬ゝの業平と
ゝゝ恋ふあゝゝ。何ゝゝ江戸ゝ
立しゝゝ狂言ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かくこゝに男色もてあそびし親馬鹿
こゝろあまつて世の習俗節親傳系
てしいやすい祇園なれども女性多く
江戸の眺を以元なつ・いつてもとつと
けて西よりの家の流とのぞまんしの下ね
幸い所ぶ小ぶまく面てもの・お特の与次郎
よりつてぶつと世驚ま似合ぶる小西ての
ちる小手利男・神の角力・地芝居の

世侍役ぶ江戸ぶ二丁町も自力ぶけい顔
ぶ賣ぶと男なぶ小ぶ早飛御ふ立ぶぶの
ぶぶぶけどやと・年年物食ぶ・ぶぶぶ
けぶて・ぶて・とぶぶ・清の寺の清玄も
あぶぶぶぶいぶぶか坊さ・・・ぶ・ぶ衣ふ
ぶぶし笠着ぶ高ぶぶの・ぶぶ・流石ぶ
世間ふ名高き大長者・いんけぶ・ぶぶの
物力ぶをふいぬと・ぶぶぶぶぶぶ人ぶ

ゝ風七化もいとべき顔色ゆゑ衣に
ぬゝとして用ゐたるぶの角に
ひりをいさてもおるで役者てあり
あぐゝ。あしが弟ゝきたい相遠世ゝう
やまゝてもあゝものゝ風さゝぶ見ようゝ
茅鶴の紋所ゝ彼お猫のゝ臣
ゝが庭ゝぬ内。堀川傳ゝ郎が家へ
ゝけ。秋ゝて評ゝの弱ゝ郎いゝ

いゝ。かゝふ供ゝもはゝゝ茅しい
西ゝ寺殿雪の殿ゝあゝを志ゝ。法西藏
修ゝのゝあゝといぐ。お志ゝんゝのゝを燒
嵐ゝ油揚ゝまゝゝゝ弱ゝ葉の内
ゝ宇ゝ信ゝゝゝ支ゝ度ゝゝのゝ。五六町も
ゝゝゝゝゝゝ頃ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ声ゝけゝゝ遠ゝゝゝ人ゝ。行ゝ
ゝやまゝゝゝ立ゝゝゝゝゝゝゝ息と

そろふ走行くそこに定九郎ぐるぐる。ちと
手わけ分一ぶ弾といひさくなる男。汗と
拭ひたるぐる詞をうけ。お婦人ちとおまち
下さる。幸ほたるぐるおまへさまあて中村
歌右ゑもんぐるいござりますぬると声うけ
なる。扨も去るる斯も早うきくものの。
なる角どわるそといふんとなるぐる真顔
ふるる。いやるる去やるる者ぐるぬ。

人遣ぐるれ〻と袖ふり拂ふふ
さぐる。かるるぐるおるくるたるしお私ゆる
お精ゆ与治郎とゆる者。ゆるびるる
くの次第るる江戸表へ手ふ。歌右
衛門さはるるたぐお獨り蔵行ひのる
法師ひり拂るるのるる。すぐる座るる
さぐる跡ゆ出ゆ茶屋ぐるけるぬ。
今の先るるる若い人を役者ぐれ

極楽とこの俗。ちくしまつ松のと走つん
こちものごとくんまちれみ。森雇乃
紋所えれこかちちきつて金さい
社者ず幸ひ。なんぼおくしかれ
ても。氏より育ちつぽんけ中のお月
さは。ごやこそ接こす姐板。おまへの
あふ歌方集つさんかなかつ又あつんなかつ
ひ寮を村一番。能ん女房じやみ能女

房じやふおまへがおいでんちやみ叶乃次
郎ず弟ひ幸ひ。お猪ちめでこやめでこやと
ひつやりいぎもへバ乃まち俄ふ威張ち
こうひ。我をかこちんでもほふあれ
しこ面目なや。今ちち行ちたちもべき。
まこと我ふを芝玩ぐぐ俗。そのもの
実方中こ平しいつ業ちもこ。おまこう
こんでもなく。仏高山ち芝石ふ乃しず。

都の芝居なかにぐう・甚吉芝居崔と
なり・板の間より冷飯と人食ゝきゝ・我も
孰とて拙くも一金を進め宮ゝん・桟
敷鶏ともなりくべきあさんで備国と
荒彫の・中頃名人秀鶴を京大坂
ゝく大あらし世浪おお江戸の芝居ゝち
度ゝと三年津正作修行中村仲蔵
ゝ出相勤ゝいゝあゝ弥ゝと出ゝれ

ゝ・我ゝゝれゝて乃ゝ行ゝもゝぐゝ・鶏ゝ
まゝ行ゝゝれゝ烏役者名面ゝ黒ゝゝゝゝ
行ゝど・ゝゝゝゝの仕役ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ・ゝ行即ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ律ゝゝ度ゝ・ゝゝゝ四冬
大乃ゝの持ゝ長者ゝゝゝゝ外堀
ゝ構ゝ・家造乃佐摘ゝゝゝゝ玄
ゝゝゝゝ内ゝゝゝゝ特ゝゝ即

鼻高くいうもの沈まて歌をうた
ひ月通と云へば花ば家内のどよめき
上をとりてうすかく今花のお江戸
みやこ人と同道あること金沢
ばかりぶ生まれぶ嗜くよつく大
らうつび則一同の関へ清ぶ種々
寧なれ答通るいより月日
新狂言ふれこと定りぶ家内

の女ども夢ふ夢ふ地ふ雷越
乃勾仕箱お扶あと今やくと
桂本ふ茶ふ書下村ふ白粉あや
みて花抑ぶ箱ふ描ふ鉄瓶
汲ふ紅をたりやう
掌ふ白粉も糠と遠ふ大ばふふ
ふ行返ふ床上下ふつぎを
くの芸拵ふ甘ふぶふ

廬坐敷と弁当をもちて東西に
桟敷うまえ〳〵いよ〳〵狂言そうまと
ち〳〵ゆけ木がへ〳〵やなぎかづと若延
とあり〳〵見物おの〳〵目もくるさぬ図
よこ乗〳〵赤山下手武蔵屋と中村あちら
と賃勅使け天王建いよ〳〵中村いよ〳〵中
歌かるがやり〳〵昌賀け声やんやと誉
奇妙と感〳〵えんえんつきて成程

と得心〳〵おもしろき時も止ぬ山猫
分もうさきも山〳〵味ものなぬ
山〳〵法〳〵節どのも出〳〵舞はとと
ええ川いあり渡あさはも命の洗濯
ゆと隠〳〵果太鼓の音はは名
陳とも〳〵手出け家路ハ庚申ど
〳〵て畳け傷さてしみあまん
芸言の達人〳〵皆人のあるを赤〳〵

お猿の与作郎大層悦び喜びて
其後人を遣わし呼出まうしておけば
そもそもまいりおさつの事寵の堪忍傳
其方どの大悦さてあらばこそ笑ひ
で下させうまくあぶむふしと牛も
俗は高慢止ぐ言やうく髭右衛門共
うふ自由なる名そうふ申ぬ事
まぐあはせとの物でなくて鼻高

となりべうれば与作郎横ぎとうと打
あらわで蕪いつすの奥ゆきれぬ限
はなつもの上まどや名人どやといつもの
又あまおさゆる住人あ様ば作る様
ぬ先ぜひ与作郎めをもまれ法ゐく牡丹
好き青はち地主ゆをおさべうあぐう
ら与作郎が笑ひ牡言ちおあふうけ
まいん是ちまふおけへぐどやと

あり乃れバ乃ま乃ま乃ちそれハ何ものの了興いざ
く早くこゝへ出すべしとの事なれハ直に猟師の
伝郎立上り直ぐに見よう我わざわざ
狂言のもぐさう赤山下まで手伝せ
と本名とあてゝ書くこれ乃ことおぼえく
きつけふ乃ちとく未そつ見ぬ乃
とかんぐ〳〵がくふかるとそつふあ
うぎや乃みまであゝ法る傳ゑ乃ゝ

野原乃草ばかり
とあひしがりめさまを見まつる真の野
そのすりに乃れ乃ちふ男ゑ乃ちよの
お猟ごの魔術なゝゞゆゝてゝゞもはや
相そつしぎりたのゝまゝ夜。素ぐりく
方歳樂と云ちぐめゝふ一ちづゑで。
らいゼゝらゝふ狐場の雑子なりゝ伝
郎がかゝちあゝふれしが。はゝ郎めぐり

きりとうとふものと。このくにみんぞく
いふものなり。汝はものの辯にて中村
敏大夫の名をつくり。人をそぶらえん
とするを敏奴。我れを是大和国の源なり
狐より。虚八百余代の後乱。和泉国の
葛の葉が末孫。三国傳生白面金毛
九尾の狐。此邦須弥野ふ迷来り。殺
生石となりぬ。いまつ宮住所

文福茶釜が子狸ぬき。黒面銀
毛一尾の狸といへるものなり。こゝに賣ケ
はらる狸百匹の甚兵衛ぶくろせ
ぬ国の司人。狸狩して面白狸を得て。
和百匹迄まづ〳〵と。持八百年にして却り
ぬ。茶釜狸ふ波狸。あ狸も子狸
孫彦狸りつもれ。ぽん〳〵放さ
扶炮ハ。腹鼓よりぬ。ぬこぐこ。

ちりのこりたること。ちりぢりにはせ
くくと逃げかくれ。我兼てより覚ある。
筆丸うづきて靖子の者防がんとふおもん
どもを狸百疋狐八百疋八百数の筆丸
ふるえ。ちりぢりたるぬるものれば狸い損
氣と堪忍。その後堀川伝兵衛が
家を住。扨てお吉あんが飼狸にて
あるさまを。たのみ通りて狸をとらしば

けるべ海が化の皮をあらして。伝兵衛が
子と化て歩まるきそのふおりの方
へ化けようつぼど行が情のこと。
海三郎ちんと海をやつ。我も化と
ゑくども他の同ものやぢ下を義。
此のち心をあらあら伝兵衛が仮
ようなる芝居拵け通。我兼て海が
てどもしのこの。是までいざあい

あるじぞあれこまやかいよ所ゝ又一声の
どろ〳〵まで堀川仕付ぬ娘おきぬと正
真はなしなるの出。昨夜黒面銀毛
一尾の狸の夢はまで迷ひ
まりしこれより後ちいかなる
道とそんげこの。立身をまのあり又
金をはめの用をれ狸どの。
はれいら狸どの罪丸を表〳〵八五

數の屋敷はまろひるの部屋
こういとぎすの〳〵あるのバ下まはい
夢ゝ現ゝ世ゝ狸ゝき出世はの
狸ゆく末を後ゝ狸ゝ古巣
三人ゝ下まゝ家路ゝ
狂是ゝ狂言好ゝまゝ
もう〳〵是ゝ正真はまゝ
はゝ富士の山ゝ金を積ゝ

四人部屋まくべまくらの用意
〜〜元のお江戸へ芝居見物いざく
〜〜富〜〜立家内のらべ伊達模様
めり物浴衣ホ端〜〜〜〜〜〜〜〜
門出〜〜江戸三芝居の大繁昌と
責物上下おなじ
咸ぞぬ者なし

建仁寺の陀羅尼聽
馴れ耳ハ文
字屋乃自笑ぶ
志〜〜〜〜〜〜

江戸節ならぬ人ぐ
のぢ意ゆゝしくこゝ
ろもとゝ来好古の世
はゆ中ゆゝしはめ吉風
ゆゝしもゆゝ結らんゆゝ

自笑其頑ぐの口調ふ
倣ゝ初物語一冊を
編ゝこゝ集てきれ
評判記のあ文ふ
まぐ見ようせ玩

文蘐評のはじまり

芝翫文蘐評の後ハ後編とも出れども狂言
乃ようあるハかりとあふまつされぬものなれ
愚眼めハわりかきゆゑ書ちらしませぬ狂
乗しくハ文字屋の評判記来春出板乃時を
まちくゆゑと奉希まつる

文化五戊辰年仲夏　通油町
十返舎半六新板